

聖書：ローマ 12：3～8

説教題：一つのからだ

日時：2016年4月24日（朝拝）

1～11章にかけて福音の教理について語って来たパウロは、12章からその福音に対する私たちの応答の生活について書き始めています。最初の1節と2節は、そのエッセンスを書き記したものです。1節ではこれまで見て来た神のあわれみに感謝して、あなたがたのからだを神に喜ばれるようにささげよ！それが霊的な礼拝であると言われました。私たちは「ただ感謝します！」と口で言って、それで終わりにするのではなく、その感謝を具体的なからだの使い方、その生活に表して行くのです。そして2節では、それが私たちの心と関係することが述べられました。この世と調子を合わせず、むしろ御言葉を通して働く聖霊のみわざによって変えられ続けよ！と言われました。

そうしてまず述べられているのが3～8節です。ここでは教会生活における自己評価のことが述べられています。2節で見た心の変化、心の更新は他人との関係において現われて来なければならない。そこで大事になるのは自己評価、自分の捉え方です。まずパウロが語っていることは、「だれでも、思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。」ということです。パウロがこう語らなければならないのは、それほど私たちはちょっとしたことですぐ高ぶりやすいからでしょう。特にここで問題になっているのは「賜物」の問題です。一人一人はみな特徴が違います。誰一人として同じ人はいません。そのため、聖霊に導かれるのではない、生まれながらの心によって、私たちはともするとお互いを比較してこう考えてしまいます。「あの人にこれはできないが、私にはこれができる。」「私はこの点で周りの人よりも優れている。」「だから私は貴重な人間として重んじられ、高く称賛されて然るべき人物である。」 こうして私たちはいつのまにか高ぶり、優越感を抱き、限度を越えて思い上がってしまうのです。しかしもしお互いが自分は他人より優れていると思い、鼻を高くしたらどうでしょうか。それは共同体の平和を壊します。互いに比べ合い、競い合い、優劣を付け合う集まりとなります。そうするなら教会も妬みと争いが絶えない所になってしまいます。

そうならないためにどうしたら良いでしょうか。それが1節後半の「いや、むし

ろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい」ということです。もしそれぞれが慎み深い考え方をしたなら、争い事はなくなり、そこは平和が満ち溢れる所となるでしょう。どうしたら私たちは慎み深い考え方をすることができるのでしょうか。そのカギとしてパウロは「信仰の量りに応じて考える」と言っています。この言葉は解釈の難しい言葉で、学者たちも色々議論していますが、なかなか一致しないところです。その中で妥当ではないかと思うのは、これは神がおのおのに分け与えてくださった賜物のことを言っていると見る見方です。「量り」とありますが、これはカップのことです。神が主権を持ってこの人にはこの賜物をこれくらい、この人にはこれをこれくらいと分けられた。それぞれは種類も違いますし、量も違います。多く与えられた者も少なく与えられた者もいます。様々なバラエティーがあります。これはその人が信仰によって用いるべきものであるので「信仰の量り」と呼ばれていると考えられます。

では「神がおのおのに分け与えて下さった信仰の量りに応じて考える」とは具体的にどうすることでしょうか。まずその一つは、私が持っている賜物は神が私に与えて下さったものだと思えることです。これは私が自分で獲得したものではありません。ですから誇るべきものではないのです。むしろ神がくださったものとして慎み深く考えなければならないのです。2つ目に神が「分け与えた」ということは、それぞれが受けている賜物はみな違うということです。ですから互いに比較して優劣を論じるのはナンセンスです。それは神が御心をもって分けられたものであり、そこには神の深いお考えがあるのです。3つ目にこのことは、私が一人で全部を持っているのではないということも意味します。賜物は分けられています。ですから自分は一人で立って行けるかのように高ぶってはならない。自分には得意な分野が与えられていても、同時に他の人に助けていただく必要がある人間だ、現に多く支えられている人間だと自覚しているという意味で、その人は謙遜な人であるべきです。そして4つ目に神の御心に従って賜物が与えられているのですから、私はその賜物を正しく活用しなければなりません。それはただ持っていれば良いものではなく、使わなければならないのです。その責任が私にはあるということなのです。

これと同じことが4～5節ではからだのたとえをもって語られています。4～5節：「一つのからだには多くの器官があつて、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあつて一つのからだであり、ひと

りひとり互いに器官なのです。」 教会はキリストのからだであり、私たちは互いに各器官であるというメッセージは、I コリント 12 章やエペソ 4 章でも語られていて、すでに私たちが何度も聞いているところでしょう。このたとえは次の真理を示しています。それは教会には「一体性」と「多様性」が同時に成立し、存在しているということです。以前の私たちは罪の力に振り回されてバラバラでした。お互いの間にすぐ壁を作り、自分と似たような自分の好む人、しかも偏った好みの人とのみグループを作り、そうでない人は排除した。そうしてある人と仲良くなるものの、間もなくその人とも仲違いする。罪は私たちを自己主張に導きますので、私たちを分裂の方向へ、バラバラになる方向へと導きます。そういう中で私たちは真に一致するとか、互いに平和の内に歩むという祝福の素晴らしさをほとんど味わわないで生活して来ました。むしろ一致できない悲しさ、妬み・争いから来る苦々しさばかり味わって来ました。しかし神は教会においてこの「一つのからだ」にたとえられる交わりを回復して下さいます。この一致は、一人の人をコピーしたような人間ばかりが集まる面白くない一致ではありません。そこには多様性があります。バラエティーがあります。そうでありながら、そこには深い一致があるのです。体が様々な器官からなっているながらも、それぞれがそれぞれに固有な働きをなすことによって美しい一致を生むように、私たちも多様性と共存する一体性の祝福に導かれているのです。

私たちはこの神の御心を仰ぎ見て、考え方をガラッと変えなければなりません。まず私たちは互いに違っていて良いのです。皆が目ではありません。皆が耳ではありません。皆が足ではありません。ですから皆と同じようにしなければならないということはないのです。みんながこの奉仕をしているのになぜあの人は何をしないのか、という目でさばいたり、あるいはある役職に関して、まだこれをやっていないのはあなただけだから今年はおあなたがする番ですよなどと言うことも正しくありません。それぞれはそれぞれの賜物に応じて仕えるべきなのです。そういう多様性を認めず、ある一つの視点からだけお互いを比べて優劣をつけるのは正しくありません。目が耳に向かって、私は物が良く見えるがあなたはそうでないと誇るのナンセンスです。また鼻が手に向かって、私は匂いをかぎ分けられるがあなたにはそれができないと論じるのもナンセンスです。みな働きが違うのです。そしてパウロが他の箇所で言っているように、「からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないもの」なのです。

そしてもう一つ、ここでパウロが語っていることは、私たちは「互いに各器官である」ということです。言い換えれば私たちはお互いにお互いのものであるということです。ですから私たちは自分に与えられている賜物を私物化してはならないのです。私たちに与えられている賜物は、神が共同体の建て上げのために、全体の益のためにと分配されたものです。私たちは果たして自分の賜物を自分一人のためだけに使っていないでしょうか。そして正しく使わずに、ただ誇っているということはないでしょうか。それは神の御心から外れたあり方です。それはみなのためによりよく使うようにと与えられているものです。

最後、3つ目に見るのは6～8節です。ここでは具体的な賜物をあげながら、勧めがなされています。このような賜物のリストは、他に1コリント12章、エペソ4章にも出て来ますが、それらと見比べて分かることは、これらのリストはピッタリ一致していないということです。つまりパウロはこれらの箇所での賜物についての包括的なリストをあげようとは意図していない。そのサンプル、一例を示しているに過ぎません。ですから私たちはここにあるどれかに無理矢理自分を当てはめようとする必要はなく、むしろこれらを参考にして、自分に与えられている賜物をわきまえ知り、ここに示されている原則を自分に当てはめて、それをを用いるようにすれば良いということになります。ここには7つの賜物がリストされていますが、その一つ目は「預言」です。聖書の中でしばしば「使徒と預言者」という組み合わせで出て来て、この土台の上にあなたがたは建てられていると言われますように、この「預言」は神の啓示を伝える働きのことです。新約聖書が完結して新しい啓示を必要としない今日は厳密な意味でこれに相当する人はいません。2つ目の「奉仕」はディアコニアという言葉で、「食卓に仕える」という意味の言葉です。これは「執事」と関係する言葉ですが、ここではしもべとして仕える様々な奉仕の働きを含めて考える方が良いと思います。3つ目の「教える人」は、聖書に基づいて教える人です。福音のメッセージ・教理を解説し、人々が理解できるように導く人です。4つ目の「勧めをする人」は「励ます人」とか「慰める人」と訳されても良い言葉です。先の「教える人」と重複する面も多々あると思われそうですが、こちらはより相手の心に訴えてお勧めをし、その人々を励まし、慰める人です。次の5つ目からは賜物ばかりではなく、それをどのように用いるべきかについても語られています。5つ目は「分け与える人」。これは自分の持ち物の中から困っている人、必要を覚え

ている人に援助したり協力する人のことです。このように人に「分け与える」ことができる賜物をいただいている人もいます。その賜物のある人は「惜しまずに」そうするようにとされています。これは「単純に」という意味の言葉で、すなわち報いを求める下心からではなく、単純な心・純粋な心で主がしなさいと示しておられる働きをしなさいということです。6 つ目は「指導する人」。これはリーダーの役割を果たす人、特に群れを治める長老たちに当てはまるものです。その賜物を頂いている人は、熱心にその務めにあたりなさいとされています。倦み疲れることなく、常に熱意をもってそれを行ない続けなさい、と。最後 7 つ目は「慈善を行なう人」。これは先の「分け与える人」とも似ていますが、こちらは物を分け与えるだけではなく、困っている人への一層のあわれみと同情をもって助ける働きをする人のことでしょう。この賜物をいただいている人は、それを「喜んで」しなさいとされています。すなわち義務感から、嫌々するのではなく、ということです。同じことをするにも、ぶつぶつ言いながらするのか、それとも喜びをもってそうするのかでは、全く違う効果と結果を相手にも自分にももたらすことは私たちも経験から知っているところです。

果たして私たちはどういう賜物を神からいただいているのでしょうか。神はおののちに信仰によって用いるべき賜物を分け与えて下さっています。今日は午後 2016 年度の信徒総会が行なわれます。昨年度の主の導きを振り返って感謝しつつ、新年度の歩みについてさらに主の導きを祈り求めて行きます。私たちはそこで自分をどのように考える者でしょうか。私自身はどのような賜物を神からいただいているのでしょうか。神はそこにどんな御心を持っておられるのでしょうか。私はそれをどのように主の御心に沿って生かし、用いて行くべきでしょうか。私たちはそのことに今一度思いを向けて、この新しい年度の主の導きを祈り求めたいのです。与えられている賜物は、私が思い上がるためのものではなく、皆の益に仕えるためのものです。それを私物化してはなりません。仮にそれが見栄えのしない賜物でも、神の前では尊いものです。それをもって必ず全体を富ませることができます。いやその働き必ず必要です。おののがその主のみこころを仰いで、主の召命に応える歩みをささげたい。そして多様性がありながらも一つであるという主のからだなる教会の祝福を益々喜び味わい、このような共同体を造り上げてくださる主を宣べ伝える歩みへ導かれたいと思います。